



ダイレクト・カッティングに託すもの……西島三重子

機械仕立ての、つなぎ合わせの歌でない、 生きたメッセージを届けたい。

14年前、私がデビューした頃のレコーディングは、16チャンネルのマルチで行われていました。それすらもレコーディングのイロハを何も知らなかった私には驚異でした。それが24チャンネルになり、今や高度な技術で可能性は果てしなく広がっています。でも、機械仕立ての音の中でかすかに聞こえる歌やつなぎ合わせの歌では、どんなに素晴らしいメッセージでも届くわけありません。私が東芝EMIに移籍して以来、ずっとアコースティック楽器にこだわり、同時録音でレコーディングを行ってきた理由の一つは、そこにあります。しかし、それが今回ダイレクト・カッティングという、私にしてみれば無謀な行為を、いとも簡単に引き受けてしまった原因でもありました。

ミーティングを重ねる度に肩に感じるプレッシャーに止めを刺したのは、ゴルフ・トーナメントのようなギャラリーでした。

コンサートなどでも同じなのですが、私は変に責任感の強いところがあって、自分がやるしかないと思うと、その世界に入り込んでしまうのです。その結果、感情を入れ過ぎたり、歌詞を間違ったり、目の前にあったとしても目に入らないなんてことが起こるわけです。で、今回も同じようなことがありました。言い訳であることは否定しません。ゴメンナサイ。

でも、それだけに今回の一つ一つのテイクに思い出があります。今、テープで聞き返しても、あの時のスタジオの皆の息づかいが聞こえるような気がします。

最後に今回のダイレクト・カッティングに企画参加して下さった皆さんに心から、貴重な体験をありがとう。

地球よ廻れ/DIRECT CUT45 Mieko Nishijima

SIDE 1 1. 蒼い夢 4'23"
(作詩: 崎南海子 / 作曲: 西島三重子 / 編曲: 美野春樹)

2. 渚にて... 3'18"
(作詩: 崎南海子 / 作曲: 西島三重子 / 編曲: 美野春樹)

3. 地球よ廻れ 4'59"
(作詩: 崎南海子 / 作曲: 西島三重子 / 編曲: 美野春樹)

SIDE 2 1. 愛に流されて 3'59"
(作詩: 門谷憲二 / 作曲: 西島三重子 / 編曲: 美野春樹)

2. 池上線 4'24"
(作詩: 佐藤順英 / 作曲: 西島三重子 / 編曲: 美野春樹)

3. 仮縫い 4'56"
(作詩: 門谷憲二 / 作曲: 西島三重子 / 編曲: 美野春樹)

DAM PC
STEREO DOR-0161

ごあいさつ

DAM会員の皆様には、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。弊社はお陰をもちまして、本年11月、創立30周年を迎えることができました。30年間の長きに亘る皆様のご愛顧に、社員一同、心より御礼申し上げます。ここにお届け致しますDAMオリジナル・ディスクは創立30周年の感謝を込めて製作致しました記念盤でございます。既に、アナログ・ディスク、コンパクト・ディスクを合わせ、60タイトルを越えるソフトを制作し、毎回、会員の皆様を始め、業界各方面でも、そのクオリティの高さで注目を集めています。この創立30周年記念盤は、いわばこうしたソフトの集大成であり、さらに皆様にお喜びいただけるソフト作りの新たな一歩となるものであります。この一枚をご家族の皆様で心行くまでお楽しみ載ければ幸いに存じます。さて、弊社は創業以来、特にオーディオ、ビジュアル

分野に積極的に取組み、単にAV機器の販売に止まらず、AVを豊かにお楽しみいただくための様々な催しをご提供して参りました。有名アーティストを招いての生録音会、コンサートへのご招待、数々のAVセミナーなど、その時々話題性や、新技術を逸早く検証する進取の気風に富んだ企画により、皆様のご支持を得て回を重ねております。弊社はこれからも、AVのハードウェアとソフトウェアは不可分のものとの考えで、諸政策を実施してまいる所存です。その一環として昨秋よりAVソフト宅配システム「そふとつきゅう」を始めました。創立30周年を機に、今後も今まで以上に時代を尖鋭にとらえ、新たな試み、新たな企画により、皆様のAVライフにご奉仕して参ります。変わらぬご支援、お引立てよろしく御願ひ申し上げます。

第一家庭電器株式会社 代表取締役社長

星野 孝

●制作にあたって

日頃は、第一家庭電器をご愛顧いただき誠にありがとうございます。

お陰様で当社もこの11月に創立30周年を迎えることができました。その30周年記念の強力盤の一つとして、今回究極のスーパー・アナログ録音方式といえるダイレクト・カッティングに挑戦いたしました。

ご存知のように、ダイレクト・カッティングは、調整卓から直接カッティング・マシーンに接続しラッカー盤にカッティングする、最もシンプルな録音方式です。生の音が鮮度を落とさず録音できるものです。他の録音方式では得ることの出来ないリアル感がありますが、カッティングをスタートすると片側全面のカッティングが終わるまで停止をすることができないのはもちろん、マルチ・デッキで録音した時のような編集なども全く出来ません。そのためアーティストの実力がそのまま現れてしまいますから、本当に力のあるアーティストでなければ不可能な録音方式です。

こうした条件を考え、実力派シンガーとして知られる西島三重子さんに、DAMレーベル3度目の登場をお願いし、このカッティングが実現の運びとなりました。

録音は、東芝EMIの品川スタジオ「スタジオ・テラ」で、8月27日、28日の両日にわたって行われました。27日にはA面の新曲3曲を、そして28日には、会員の皆様に録音現場をつぶさにご覧いただきながらB面3曲の録音となりました。

西島三重子さんは2日間とも十分に実力を発揮され、また、バックの演奏者の皆さんも、緊張の中にもリラックスしたムードで2日間を頑張ってくださいました。こうして完成しましたディスクは、リアルでイキイキとした歌声を十分に楽しめる仕上がりとなり、アーティストの息継ぎまでも聞こえて来るほどのリアル感で、ダイレクト・カッティング方式の良さを十分に楽しんでいただけるものではないかと思えます。

自然と雰囲気あふれるボーカル・レコードとして、また、オールマイティのオーディオ・チェック・レコードとして、今世紀最後のダイレクト・カッティングとなるかもしれないこのレコードを、皆様の愛聴盤として末長く楽しんでいただければ幸いです。

最後に、今回の制作にあたりましては、何時にもまして、東芝EMI(株)および技術スタッフの皆様にも多大な御協力をいただきましたことを心より御礼申し上げます。

DAM推進委員会 **DAM PC**

並のボーカル・アルバムには無いリアルさ、空気の振動する様子まで実在

DAMオリジナル・ディスクは、いつも僕の心を熱くしてくれるが、今回はいつも以上にホットな気分になった。その理由は久々のダイレクト・カット・ディスクだからだ。

主役は3度目の登場となる西島三重子で音録りは8月27日と28日の二日にわたって行なわれた。久々のダイレクト・カット・ディスクであるし、もう最後の機会かもしれないのでレコーディングを見学することにしていた。初日は都合がつかず二日目にウォーター・フロントにあるスタジオTERRAへ愛車を飛ばした。制作スタッフに聞くと初日は順調ということで、そのせいか最後になるかもしれないダイレクト・カット・ディスクの制作とは思えないリラックスした雰囲気がスタジオ内に漂っている。カット・ルームも同様にスタッフがスタジオと連絡を取り合いながらテキパキと仕事をこなしている。とはいってもアーティストもミキシング・エンジニアもカット・エンジニアもディスク片面通して一つの失敗も許されない。それを意識し過ぎるとプレイが固くなってしまいが、すべてが上手く行くとテープ・レコーディングにはない生々しいサウンドが得られることになる。今回は3~4テイク録るとのことだが、リハーサルまで入れると片面分だけで最低2時間近くも演奏し歌わなければならない。バックのミュージシャンも大変だが、ボーカリストの負担は

相当なものになる。彼女のように歌唱力のある本当に実力あるボーカリストでなくては出来ないことと言えるだろう。最終テイク回りになると幾らかハスキーさが増したように思えたが、彼女ならではの透明感やシルキーなタッチは失われず、むしろ艶っぽく感じられた。

ミキシング・ルームのレイ・オーディオ製のダブル・ウーファー・システムRM-4Bで聴くとバランスのとれた鮮度の高いサウンドが得られていたので、僕が愛用しているパーチカル・ツイン・ウーファー・システムRM-7Vで聴くのを楽しみにしてスタジオを後にした。2週間ほどして僕の手許へディスクが届いた。いつも通りの厚手ディスクなので手に持つとズシツとした手応えが感じられ頼もしくなる。針を降ろす瞬間のある種の緊張感アナログディスクならではのものだし、降ろしたからには片面は一気に聴いてしまいたくなるのもアナログディスクの良いところだ。慎重にプレーヤーにセットし聴きはじめると、レコーディ



ング当日とほとんど変わらない鮮度の高いサウンドが聴けた。そしてオーディオ・ファイル向けの高音質ディスクにありがちな迫力はないもののFレンジもDレンジも十分に確保され音楽的にも音質面でもハイグレードな作品に仕上がっている。1面はドラムスが入り2面はドラムレスなので、そのサウンドの違いも一つの聴きどころになる。またウッドベースのマイクも1面ではノイマンC-49とソニーC-55ACであるが2面ではC-269とC-55ACという組み合わせなのでその回りも興味を引かれるところだ。

*着い夢

1面の3曲は、本LPのために書き下された新作で、この作品は過ぎ去った若き日の思い出を断ち切ろうとする女心を唄っている。透明度の高い彼女のボーカルはヌケが良く左右のスピーカーの間にフツと浮き上

がってくる。ハーモニックス奏法を混じえたアコースティック・ギターのアレンジはピュアな響きが得られ、低域までスムーズに伸びた量感豊かなベースも鳴りが良く並のボーカル・アルバムには無いリアルさがある。そしてエレクトリック・ギターのエフェクターの効果やエコー成分などのディテールも明晰に描き出される。

*渚にて...

ゆったりとしたボサ・ノヴァのリズムで唄われる失恋の歌。ウッドベースは量感が充分にありながら輪郭を甘くすることはない最低音付近の伸びも申し分なくCDの低音再生能力にも負けないクオリティを持っていると実感する。ガット・ギター濁りのないピュアな響きやピアノのクリアーさ、張り艶のあるボーカルなど聴きどころが沢山ある。全体にSNも良く小音量で聴いて



的に再現するダイレクト・カッティング・ディスク。

もボーカルの微細な表情やヴィブラートなどがリズム・セクションに埋もれてしまうということが無い。

*地球よ廻れ

新しい恋の始まりの予感を季節の移ろいに例えたナンバーでゆったりとした3拍子にノッて歌われる。ピアノとアコースティック・ギターのアルペジオをバックに唄う彼女のボーカルは透明度が高く細かなヴィブラートまで鮮明に再現できる。また鮮度の劣化も最小限でボーカルのエコーにも濁りが感じられずミキシング・ルームのサウンドがそのまま僕のRM-7Vから出てきたように思えた。エンディングはインストゥルメントによるフェードアウトだが最内周にもかかわらずハイレベルな箇所がありスタッフはヒヤッとさせられたのではないかと思う。

*愛に流されて

このトラックからバックの編成は変わりドラムレスとなり、またウッドベースのマイクがノイマンC-49からC-269に替えられているのが興味深い。C-49もウッドベースらしい暖かみと量感のあるサウンドだったが、C-269ではさらに低域の量感が増すと同時に深みのあるサウンドとなっている。この辺りの違いが正確に再現されれば再生装置の低音に問題はないといえるだろう。またアコースティック・ギター2本がボーカルを包み込むように左右に配置されているが、マイクの違いによるサウンドの微妙な差が明確に出るかどうかポイントになる。耳許で囁くように始まる西島三重子のボーカルは澄みきっており中高域の歪感がチェックできるだろう。後半は張りのあるボーカルが聴けるが中域の充実したシステムで

ないとナーバスな響きになってしまうかもしれない。

*池上線

前作のライブ・アルバムにも収められていた彼女の得意なナンバーで1コーラスを無伴奏で唄っているが、彼女の歌唱力の高さを痛感する。透明感のあるボーカルはプレスやヴィブラートなど細かな表情まで鮮明でまるで目の前で唄っているような錯覚を起こす。ウッドベースは太いトーンで安定感があり、間奏部のエレクトリック・ギターのソロも伸びやかな高域でピッキングの立ち上がりもスムーズだ。またエンディングのベースのポウイングも一つの聴きどころといえるだろう。

*仮縫い

恋人が去った後の悲しい心情をしつとりと歌い上げている佳曲でピアノのイントロに始まり1コーラスをピアノのみをバックに説得力あるボーカルを聴かせている。Lchのギターが12弦ギターとなりサウンドに



変化をもたらしているが、12弦ギター独特のニュアンスが再生できれば分解能に心配はない。更に、ベースはウッドからエレクトリック・ベースに持ちかえられ、空気の振動する様子まで実在的に再現できるのは高品質なダイレクト・カッティング・ディスクならではのだろう。またエンディングの立ち上がりの良いピアノは、カートリッジのトレース能力をチェックするのに最適だろう。



本作を聴き終えた後アナログディスクには未だ未だ可能性があるかと痛感すると同時に音楽を聴いたという心地良い充実感も得られた。そして僕はSMEのシリーズVやオルトフォンMS-3000などアナログ系コンポーネントを揃えておいて本当に良かったと思っている。こんな素敵な作品をプレゼントしてくれた西島三重子、エンジニア、そして制作スタッフに感謝したい気持ち一杯である。





※ダイレクト・カッティングによるレコーディングのため、演奏者のプレイノイズ、
ボーカルのリップノイズ等が収録された部分があります。ご了承ください。
※テイク違いにより、演奏、収録時間に差異がありますことをご了承ください。



音楽の熱い感動をそのままパッケージする、素晴らしい試み。ダイレクト・カ

収録にあたって/ミキシング・エンジニア：小菅憲一

澄み切ったボーカルとアコースティック楽器のあたたかさをポイントに、様々なマイク、エフェクターを駆使しました。

前回、『西島三重子ライブ』のレコーディングにあたって、アルバム制作の現場を公開するような緊張感あふれる収録と表現しました。しかし、今回のダイレクト・カットティングでの緊張感はその次元をはるかに越えていました。まず、1面はこの企画のために西島三重子書き下ろしの新曲3曲、2面はオリジナルのヒット曲で構成され、OKテイクを少なくとも4セットを確保しなくてはならないことです。このOKテイクと言うのも、単に歌唱、演奏の出来が良いだけではだめで、ダイレクトにカットティングされたラッカー原盤の音溝の状態がOKにならない場合は最終的なOKテイクとはならないのです。次に、この収録と同時にフェーダーの上げ下げをして編集作業も行なわなければならないのです。特に曲間では、ミュージシャンが譜面をめくる音や、楽器を持ちかえる音、イスのきしみ等プレイノイズを極力目立たないようにしなくてはなりません。更に、テイク毎にミュージシャンの思い入れ、ノリが微妙に変化するのでフェーダーの上げ下げもテイクによって異なり、このアウトプットがダイレクトにカットティングされていると思うと手に汗せずにはられませんでした。

それでは、今回のダイレクト・カットティングでの特徴をあげてみましょう。まず、今企画のテーマである西島三重子のすみきったボーカルとアコースティック楽

器のあたたかさにポイントを置いた収録には、管球式のマイクにこだわってみました。ボーカルには、ノイマン社の管球式マイクC-269とUREI社管球式ピークリミッターLA-2Aを使用してみました。アコースティックピアノには、C-269、AKG社C-451×2、ノイマン社SM-69管球式ステレオマイクの3種類でマイクアレンジしてみたのですが、私自身初めての試みであるSM-69での収録となりました。ウッドベースは駒の中にスポンジで巻いたSONY社コンデンサーマイクC-55ACと、外側からノイマン社C-49管球式マイクを使用(2面は、C-269で収録)してみました。アコースティックギターの収録は、私自身が好きなこともあり、デビュー二十余年を経ても現役であるRCA社77リボンマイクをガットギター(A-2)と12弦フォークギター(B-3)に使用し、

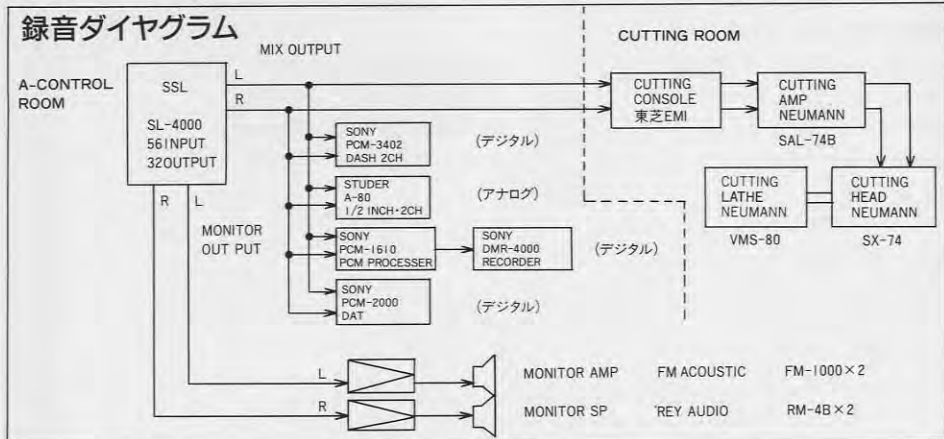


両ギターの内蔵にはSONY社ECM-50コンタクトマイクを内蔵し収録してみました。エレクトリックギターは、エフェクターアウトをダイレクトに収録し、デジタルハーモナイザーAMS社dmx15を使用し色付け、奥行感を出してみました。リバーブには、AMS社デジタルリバーブrmx16をメインにEMT社の鉄板エコー、EMT-140を使用してみました。

以上、さまざまなマイク、エフェクター類を駆使して今回のダイレクト・カットティング・ディスクとして収録したのですが、なによりも強く感じたことは、ミュージシャン、エンジニア、スタッフのチームワークなくしてダイレクト・カットティングはあり得ないということだと思います。

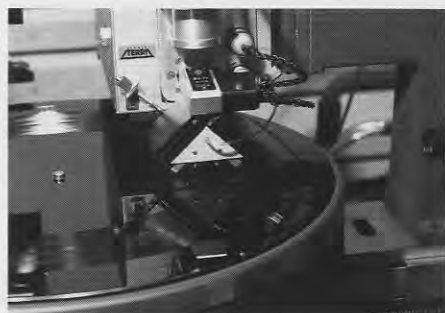
最後に、デジタルオーディオ全盛の中、ダイレクト・カットティングの録音を担当さ

せていただいたことに第一家庭電器(株)、および関係各位に敬意を表します。



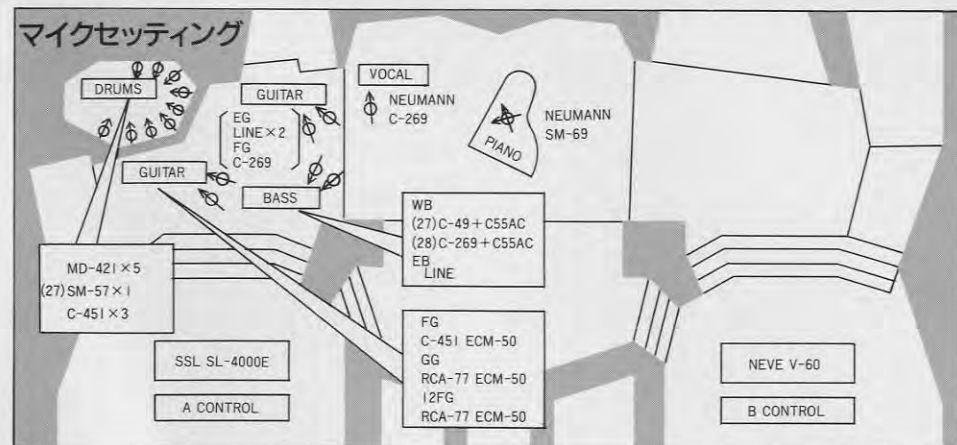
わたしにとってのダイレクト・カッティング／カッティング・エンジニア：竹内昭五
技術の裏付けと、カンが要求される困難で、名誉な仕事でした。

ダイレクト・カッティングのクオリティは、企画から始まりミュージシャン、ミキシング・エンジニアの技術的な裏付けがあって初めて成り立つものであると思う。例えば、DAMハイクオリティレコードのカッティングの場合には、テープレコーダーのアドバンス再生ヘッド等で音溝と音溝との間隔、音溝の幅と深さをコントロールしながらカッティングして行けるので音溝と音溝との接触や、音溝が無くなるようなことは防止できる。



しかし、ダイレクト・カッティングでは以上の制御は望めず、楽曲の曲調、楽器編成、収録時間等のデータから音溝の間隔、溝幅、そして最も重要なカッティング・レベルの設定まで、全てカッティング・エンジニアとしてのカンを頼りに作業を進めなくてはならない。特に、カッティング・レベルはミュージシャンのノリが良くなると2~3dBは違ってくるもので、数枚のラッカー原盤が使用できなくなった。それなのになぜ、ダイレクト・カッティングなのか。それは、つなぎ合わせた音楽でなく、ミュージシャン、エンジニア、スタッフが一体となった手作りの音楽が、最小限の信号変換で収録され、熱い感動をそのままパッケージしていることにつきると思う。

ここに、今世紀最後であろうダイレクト・カッティングに参加できたことは、カッティング・エンジニアとして名誉に思う。



エジソンがレコードを発明した当時のカッティングはダイレクト・カッティングであり、以後テープレコーダーの技術進歩、マルチトラック化、編集の容易さにより、現在に至るまでほとんどマスターテープによるカッティングが行われてきました。

今回DAMでは、究極のレコード制作ともいえるダイレクト・カッティングを採用。そして、超精密な製造方法。世間の流れはコンパクトディスクが主流となりつつある昨今、製造過程に介入するテープ録音、編集を取り除き、アナログレコードとして最高峰のクオリティの高いレコードを皆さまにお届けします。

ダイレクト・カッティングとは、テレビ番組にたとえれば生中継です。テレビ電波が、カッティング以後の製造工程といえます。

ダイレクト・カッティング・レコードのクオリティを十分に引き出すためにレコードの製造にあたってはコンパクトディスクの製造で培ったノウハウで、音質重点主義に徹して生産性を度外視して製造しました。

それでは今回の特徴を紹介します。演奏はリードインが終わってからスタートし、片面の収録時間13分から14分間ミスがないのは当然ですが、3曲全てがOKテイクでなければ原盤として使用できないのです。ミュージシャン、ミキサーからカッティング・エンジニアに至るまで、ラッカー盤のリードアウトでカッタースタイラスを上げるまでミスが許されません。

例えば、カッティング段階のミスは直接ミュージシャンにおよび、オーバーレベルカッティングでカッターヘッドを壊したとき等、カッティングマシンを修理している時間はスタッフ全員が待たなければならぬと云う過酷な条件下での作業なのです。

従来からDAMレコードは、ノンリミッター、ノンイコライザーでのカッティングであり、更に今回はダイレクト・カッティングであることから、テープレコーダーの録音、再生で発生するワウフラッターがない、ミキシングコンソールからのDレンジの広い信号が直接カッティングコンソールのフェーダーだけを通りカッティングアンプに入る等の特徴を十分に活かすため、カッティングにおける信号まわりを出来るだけ簡素化、材質を厳選（信号ケーブルは各社のケーブルを試聴し、今回はPC-OCCを採用）しました。予備のカッターヘッドはドライブモジュールも一緒に調整し、トラブル時にすぐ対応できる周到な準備で行いました。

製盤上でのディスクレコードの平面・平滑性は、音質へ影響する重要なファクターでもあり、総合的な意味で音溝波形の成形精度に集約されますが、今回のDAMレコードの高品質化のポイントはこの点にもあります。

アナログディスクの徹底した性能分析により、ビデオディスク成形の周辺技術を応用し、プレス金型を新しく開発することからスター

トした重量の製造技術とその設備を利用し、150g重量レコード用プレス金型の精度や鏡面性を対処する事で、ディスク面のストレス(歪)を最小限に押え込み、忠実な音溝波形を成形しています。

また製造段階では、いままでのDAMハイクオリティディスクの製造で蓄積した技術を充分いかし、特にクリーンルーム内でメッキ処理を行い、スタンパー製造は高密度な電解メッキ方法と研磨仕上げ、プレス工程では高品質材料を使用し150gの精密プレスにより真円性の大幅な向上にともないマスターテープのカッティングでは得られない歪・ワウフラッターの極めて少ない、ハイクオリティレコードです。

ご存知のように、ステレオの音溝は、水平振幅は左右信号の和(L+R)、上下振幅は、左右信号の差(L-R)として録音カッティングされており、DAMレコードで代表されるハイクオリティレコードは、通常のレコードより+5dB程もハイレベルでカッティングされ、音溝幅の変化は、20から250ミクロン(L-R)程に達する位、高精度化しております。

例えば複雑な音溝になればなる程、その再生時に於いてはカートリッジの振動エネルギーが逆にレコード盤を烈振させ、レコードの固有共振によって、その振動がカートリッジヘリアクションされ、クロストーク、セパレーション、歪等さまざまな音質劣化の要因になると考えられます。共振はマスとコンプライアンスの積で表わされますから、レコードの固有共振はレコードの重量を重くし、マス成分をコントロールすることで音質の影響の少ない帯域へ共振周波数を下げ、低域特性の改善を図っています。

レコード形状も再生条件を考慮し、今までのフラットレコード以上に精度の高いフラットプロフィールを採用しました。このフラットネスの良さは、ターンテーブル・マットとの密着性を大幅に改善し、再生時に起こり得るレコードの共振がマットを介して逆にレコードヘフィードバックされる、このリアクションを緩和させる効果があります。

この様に高密度レコードでは、特に安定度の高い盤質が必要とされますから、従来から高品質用として開発した材料をベースに、新タイプの配合剤・熱安定効果の高い安定剤の組合せにより、一層ゲル化性の改善を図り、更に新タイプ帯電防止剤による静電除去効果とあいまって極めて安定度の高いS/N比の良いレコードが出来ました。

以上の様に今回のDAMレコードは、現状の最高水準の製盤プロセスを経て製作されております。

デジタルサウンドとの出会いも最近多くなって来ていると思いますが、是非、究極のアナログディスク、ダイレクト・カッティング・レコードのもつサウンドの魅力を充分に感じ取って頂ければ幸いです。

●30センチ45回転レコードの取扱いについて

このレコードは、通常の33 $\frac{1}{3}$ 回転レコードと変わった点はありませんが、念のため次のことに御注意下さい。

(1)オートプレーヤー、オートチェンジャーでも使用できますが、ある特殊なものでは完全な自動演奏が出来ないこともあります。このような場合、手動方式に切替えてお取扱い下さい。

(2)回転が速くなるために、レコードの反りの影響が33 $\frac{1}{3}$ 回転にくらべて出やくなります。レコードの保管、取扱いには充分注意して下さい。

(3)再生する部屋の温度が低いと、カートリッジが正しく作動しないことがありますのであらかじめ室温を15°C~20°C位に保って下さい。

(4)再生時には特にアームのラテラル、インサイドフォースのバランス、及び再生針の磨耗状態、針圧（メーカー指定の重い方にセット）には充分気を付けて下さい。

(5)このレコードは、ハイクオリティのオーディオ・チェック・レコードのため、カートリッジによってはトレースがむずかしい場合があります。

レコード材質——プロユース材料使用

●カッティング・データ

Cutting Date: 27,28 August 1988

STUDIO TERRA CUTTING ROOM.

Drive Amplifier: Neumann SAL-74B

Cutting Lathe: Neumann VMS-80

Diamond Cutting Stylus

Cutting Head: Neumann SX-74

Non Limitter

Non Equalizer

●スタッフ

プロデューサー：平形忠司、小山正敏

ディレクター 出口敏彦

ミキシング・エンジニア：小菅憲一

アシスタント・エンジニア：福田豊光、松村崇

カッティング・エンジニア：竹内昭五

サウンド・エンジニア：原清介、田口庄司、勝又真

メンテナンス 伊藤勲、中村信、金子秀作

フォトグラファー 近藤信治、志田資幸

デザイン 株式会社グラバー企画

コーディネーター：佐藤兵彦（新室内楽協会）

録音場所：TERRA Ast. (東芝EMI)

録音年月日：1988年8月27日、28日

制作協力：株式会社サンデュエット

企画・制作 第一家庭電器株式会社

製造 東芝EMI株式会社

DAMPG